

企画展「中川禄郎－井伊直弼を支えた儒学者－」展示作品リスト

No.	指定	資料名称	員数	作成者	制作年	所蔵者	内容
1 藩儒中川禄郎の誕生							
1	重文	サムライジュウユイシヨチョウ 侍中由緒帳（五五）	1冊		江戸時代 ～明治時代初期	彦根城博物館（彦根藩井伊家文書）	彦根藩士の履歴を記した帳面。
2		ナカガワロクロウゾウ 中川禄郎像	1幅	賛：谷鉄臣	明治23年(1890)	彦根城博物館（中川家伝来資料）	禄郎の肖像画に、門人の谷鉄臣が賛を書き入れた一幅。
3		トウジライユチョウ 当寺来由帳	1冊	中川勘解由二代 斐雄	文化13年(1816)	善照寺	善照寺や住持の来歴を記した帳面。
4		ギョソナカガワセンセイギョウジョウ 漁村中川先生行状	1冊	田中芹坡	安政2年(1855)	彦根市立図書館	師の禄郎の一周忌に際して禄郎の経歴や性格などを記した帳面。
5		シチゴンシヨ 七言詩書「棄物従来好丈夫・・・」	1幅	中川禄郎	文政13年(1830)	彦根城博物館（中川家伝来資料）	頼山陽に宴の席上で送った漢詩。
6		ライサンヨウライエイシ 頼山陽来悦詩	1巻	中川禄郎	天保3年(1832)	彦根城博物館（中川家伝来資料）	頼山陽の来訪を喜び、詠んだ漢詩。
7		ギョソンスイヒツ 漁村随筆	1冊	中川禄郎	江戸時代後期	彦根城博物館（中川禄郎家文書）	頼山陽や藩士らとの交流などを漢文調で記した帳面。
8		オカキツケノウツシ 御書付之写	1通	木俣土佐ほか	天保13年(1842)	彦根城博物館（中川禄郎家文書）	禄郎を十人扶持で召し抱えることを伝えた書状の写し。
2 世子直弼との交わり							
9	重文	スウジョウノゲン 薨薨之言	1冊	中川禄郎	弘化4年(1847)	彦根城博物館（彦根藩井伊家文書）	藩主としての心構えや藩政の課題などを直弼に説いた書物。
10		サンカンロク 三諫録	6冊	中川禄郎	江戸時代後期	彦根城博物館（中川禄郎家文書）	歴史書の中から集めた主君への諫言を整理した書物。
11		ナカガワロクロウシヨウ 中川禄郎書状	1通	中川禄郎	嘉永3年(1850)	個人（奥野文雄家文書） （滋賀大学経済学部附属史料館寄託）	彦根城下困窮のため、米価の引き下げを直弼に上申した書状。
12	重文	ナカガワロクロウシヨウ 中川禄郎書状	1通	中川禄郎	嘉永3年(1850)	彦根城博物館（彦根藩井伊家文書）	直弼に献金をした伴右衛門に褒美を取らせるよう、直弼に依頼した書状。
13	重文	ナカガワロクロウシヨウ 中川禄郎上書	1通	中川禄郎	嘉永3年(1850)	彦根城博物館（彦根藩井伊家文書）	明性寺からの献金の提案を断るよう、直弼に上申した書状。
3 弊風を改革すー禄郎の教育論ー							
14		ナカガワロクロウシヨウ 中川禄郎書状	1通	中川禄郎	江戸時代後期	個人（奥野文雄家文書） （滋賀大学経済学部附属史料館寄託）	江戸で近々藩主に講釈を行う予定である旨を、門人の武右衛門に伝えた書状。
15	重文	ナカガワロクロウイケンシヨ 中川禄郎意見書	1冊	中川禄郎	嘉永3年(1850)	彦根城博物館（彦根藩井伊家文書）	藩校・弘道館の改革として朱子学の採用を主張する意見書。
16	重文	ナカガワロクロウシヨウ 中川禄郎上書	1通	中川禄郎	嘉永3年(1850)	彦根城博物館（彦根藩井伊家文書）	藩校・弘道館の改革として上位の者から学び直すことを主張する意見書。
4 開国前夜の彦根藩							
17	重文	ナカガワロクロウシヨウ 中川禄郎書状	1通	中川禄郎	嘉永元年(1848)	彦根城博物館（彦根藩井伊家文書）	三浦半島の海岸防衛を指揮する適任者が藩内にいない旨を直弼に伝えた書状。
18	重文	ナカガワロクロウシヨウ 中川禄郎上書	1通	中川禄郎	江戸時代後期	彦根城博物館（彦根藩井伊家文書）	西洋を知る上での良書を直弼に上申した書状。
19	重文	チュウヘンカンケン 籬辺管見	1冊	中川禄郎	嘉永6年(1853)	彦根城博物館（彦根藩井伊家文書）	禄郎が開国、通商を主張した意見書。

企画展「中川禄郎－井伊直弼を支えた儒学者－」展示作品リスト

No.	指定	資料名称	員数	作成者	制作年	所蔵者	内容
20		ゲンバンナカガワセイシヨカンウツシ 彦藩中川生書翰写	1冊			個人（彦根藩大久保家文書）	谷鉄臣ら門下へ宛てた書状を写した帳面。
21	重文	ムトウシンザエモンジョウウシヨ 武藤信左衛門上書	1通	武藤信左衛門	嘉永6年(1853)	彦根城博物館（彦根藩井伊家文書）	アメリカからの開国要求を拒否し、戦うことを直弼に主張した書状。
22	重文	オカモトハンスケジョウウシヨ 岡本半介上書	1通	岡本半介	嘉永6年(1853)	彦根城博物館（彦根藩井伊家文書）	開国はやむを得ない旨を直弼へ伝えた書状。
23	重文	ベツダンソソンジヨリガキシタガキ 別段存寄書下書	1通	井伊直弼	嘉永6年(1853)	彦根城博物館（彦根藩井伊家文書）	彦根藩として幕府に提出した意見書の下書。
5 禄郎の門人たち							
24		モンジンセイメイロク 門人姓名録	1冊	中川禄郎	江戸時代後期	彦根城博物館（中川禄郎家文書）	門人の名前や居所などを記した帳面。
25		シチギョウウシヨ 七行書「濃之為俗也・・・」	1幅	中川禄郎	天保13年(1842)	個人	門人の棚橋無逸に送った漢文調の書。
26		カイチョウ 廻帖	1冊	彦根御同門中	安政2年(1855)	彦根城博物館（中川禄郎家文書）	禄郎の一周忌に際し、改葬と墓碑建立にかかる寄付金を門人達に募った帳面。
27		シヨウヒョウ 収票	1通	広慈六代現住 泰嶺ほか	安政2年(1855)	彦根城博物館（中川禄郎家文書）	改葬先の墓地の土地代金を支払った際の領収書。
6 禄郎の交流と文化的活動							
28		イチギョウウシヨ 一行書「長福丸」	1幅	中川禄郎	天保15年(1844)	彦根城博物館（岩崎正三氏寄贈資料）	船の旗等の下書と推測される書。
29		ギョソンプンコウ 漁村文稿	3冊	中川禄郎	江戸時代後期	彦根城博物館（中川禄郎家文書）	漢詩、漢文の写しや草稿などをまとめた帳面。
30		スイウンボウシャブン 水雲茅舎文	1冊	中川禄郎	江戸時代後期	彦根城博物館（中川禄郎家文書）	漢文の写しや草稿などをまとめた帳面。
31		ギョソシンコウ 漁村詩稿	1冊	中川禄郎	天保14年(1843) ～嘉永4年(1851)	彦根城博物館（中川禄郎家文書）	漢詩などの草稿をまとめた帳面。
32		タケガサン 竹画賛	1幅	画：牧野忠晴 賛：中川禄郎	江戸時代中期 ～後期	彦根城博物館（中川家伝来資料）	越後長岡藩主・牧野忠精が描いた竹に、禄郎が賛を書き入れた一幅。
33		ハイクシヨ 俳句書「禿山の面目つゝむ霞哉」	1幅	中川禄郎	江戸時代後期	善照寺	禄郎が吟じた俳句の書。
34		シンノウガサン 神農画賛	1幅	画：野村玉溪 賛：中川禄郎	弘化3年(1846)	個人 （彦根城博物館寄託）	名古屋の画家・野村玉溪が描いた神農に、禄郎が賛を書き入れた一幅。
35		シチゴンシヨ 七言詩書「憑仗人肩扶酔帰・・・」	1幅	中川禄郎	天保9年(1838)	個人 （彦根城博物館寄託）	酒に酔った帰り道を詠んだ漢詩。
36		ナカガワロクロウラシヨジョウイッカツ 中川禄郎等書状一括	1巻	中川禄郎ほか	江戸時代後期	彦根市立図書館	子どもの中川勘解由に宛てた書状や、実父の小原君雄からの書状をまとめたもの。
37		ナカガワロクロウラヨリアイガキフクロ 中川禄郎等寄合書袋	1点	中川禄郎ほか	弘化4年(1847)	彦根市立図書館	禄郎や門人の谷鉄臣らが寄合書きした袋。
38		ナカガワロクロウシヨジョウ 中川禄郎書状	1通	中川禄郎	江戸時代後期	個人（奥野文雄家文書） （滋賀大学経済学部附属史料館寄託）	江戸での近況報告や、彦根に残した妻子の心添えを門人の武右衛門に依頼した書状。

※作品No. 32・No. 33は展示期間の前期（令和3年7月17日～8月2日）のみ展示し、No. 34・No. 35は展示期間の後期（令和3年8月3日～8月17日）のみ展示します。

作 品 解 説

1 なかがわろくろうぞう 中川禄郎像 1幅 (作品リストNO.2)

賛：たにてつおみ 谷鉄臣筆

縦 126.5cm 横 37.5cm

明治時代 明治23年 (1890)

当館蔵 (中川家伝来資料)

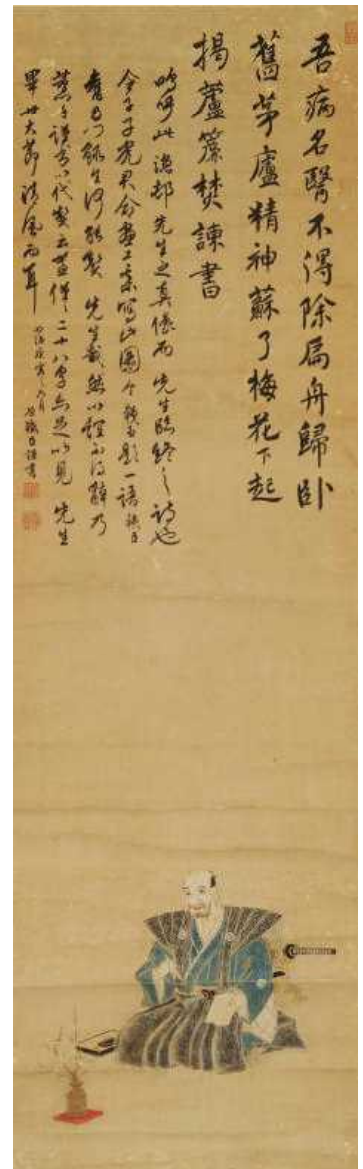
中川禄郎の実子である中川勘解由なかがわ かげゆが画工に描かせた禄郎の像に、禄郎の門人である谷鉄臣が明治23年 (1890) に賛を書き入れた作品です。その賛には禄郎の辞世の漢詩も記されており、禄郎の姿を現在に伝えます。

禄郎の辞世の七言詩

吾病名医不得除 扁舟帰臥旧茅廬
精神蘇了梅花下 起掲蘆簾焚諫書

【現代語訳】

私の病は名医も取り除くことができない
小舟で旧い茅葺きの庵に帰り、横たわる
私の精神は庵の側にある梅の花の下ですっかり蘇る
起き上がってあし すだれ蘆の簾を掲げ、思い残すことなくかんげん諫言の書を焚く



中川禄郎像 (全体)



中川禄郎像 (部分)

2 漁村中川先生行状 1冊 (作品リストNO. 4)

田中芹坡筆

縦 24.0cm 横 17.0cm

江戸時代 安政2年 (1855)

彦根市立図書館蔵

安政元年 (1854) 12月2日、^{ろくろう}禄郎は59歳でその生涯を閉じ、城下の^{そうあんじ}宗安寺 (浄土宗、現彦根市本町) に埋葬されます。その翌年、理由はわかりませんが、禄郎の一周忌にあわせて、亡骸を^{こうじいん}広慈院 (黄檗宗、現彦根市里根町) に埋葬し直すことになりました。

「漁村中川先生行状」は、それに際し、禄郎の門下を代表して、儒学者の田中芹坡が記したものです。ここでは、禄郎が善照寺の中川勘解由家の養子となった経緯をはじめ、諸国遊学の様子や終生の師・^{らいさんよう}頼山陽との出会い、^{はんじゅ}藩儒となったいきさつなど、これまで十分に紹介されてこなかった禄郎の前半生を彩る様々な出来事が取り上げられています。

また、芹坡は師・禄郎の人柄を「大らかで真摯、外見を飾らず、老若分け隔てなく親しむ」と評し、禄郎が顔を崩して大笑いする癖があったことや、鐘の音ほどに大きな声であったことなども記しており、本作品は等身大の禄郎がうかがえる貴重なものと言えるでしょう。



3 蕪蕘之言 1冊 (作品リストNO. 9)

重要文化財
中川禄郎筆

縦 25.4cm 横 18.0cm

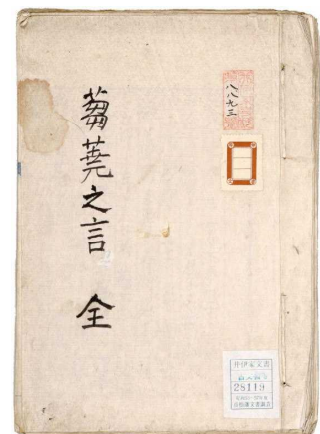
江戸時代 弘化4年 (1847)

当館蔵 (彦根藩井伊家文書)

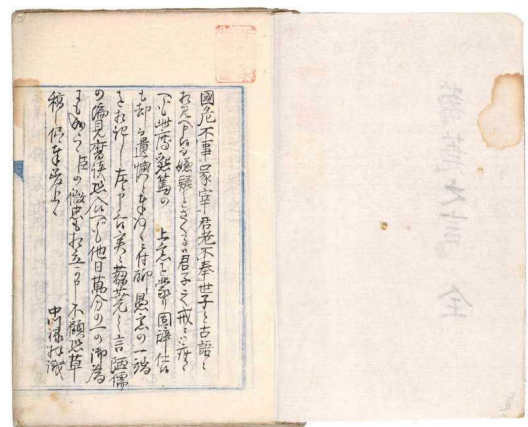
弘化4年 (1847) 9月、前年に藩主井伊直亮の世子となった直弼は、世子に必要な知識などを身に付けるべく、禄郎に人君 (君主) の道について意見を求めました。これに応じて、禄郎が私見をまとめ、献上した書物が「蕪蕘之言」(身分の低い者からの言葉の意) です。

本書には、彦根藩主井伊家がどうあるべきか、また藩政の課題にどう対処すべきかなどが具体的に記されています。中でも、不十分な藩士教育について、禄郎は身分に応じた教育の必要性和藩校の改革を説き、藩士の教育体制を根本的に見直すことを主張しました。

嘉永3年 (1850) 11月に藩主となった直弼は、禄郎が指摘した教育改革などの政治課題に早々に取り組み、概ね禄郎の進言通りに藩政運営を進めていったのです。直弼にとって禄郎の「蕪蕘之言」は、自身が世子として学ぶべきことを教えてくれるのみならず、その後自身が藩政の舵取りを行う際の道標にもなるものでした。



(表紙)



(冒頭部分)

4 ^{ちゅうへんかんけん} 籌辺管見 1冊 (作品リストNO. 19)

重要文化財
なかがわろくろう
中川禄郎筆

縦 28.0cm 横 20.0cm

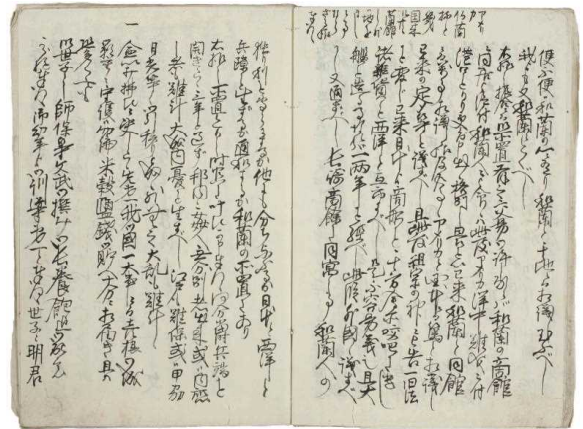
江戸時代 嘉永6年 (1853)

当館蔵 (彦根藩井伊家文書)

嘉永6年 (1853) 6月、開国要求を旨とする国書がペリー率いるアメリカ艦隊によってもたらされました。幕府がこれへの対応を協議するにあたり、彦根藩にも意見を求めたため、早速藩内で意見が集められています。

「^{なのおすけ}籌辺管見」は、こうした中で禄郎が藩主直弼に上申した意見書です。アメリカの要求を拒否して戦うことを主張する意見が家中に多い中、禄郎は、現状勝ち目のない軍事衝突を避けるためにいったん開国し、通商を通じて先進的な兵器や軍事技術を取り込むことふで富国強兵を進め、状況が許せば再び鎖国に戻すことを主張したのです。

この主張が直弼に採用され、彦根藩の意見は「^{なのおすけ}籌辺管見」を基に作られました。幕閣の中心においても要求拒絶派が多数を占める中、開国を主張した彦根藩の意見は異彩を放つものとなりました。



5 ^{もんじんせいめいろく} 門人姓名録 1冊 (作品リストNO. 24)

なかがわろくろう
中川禄郎筆

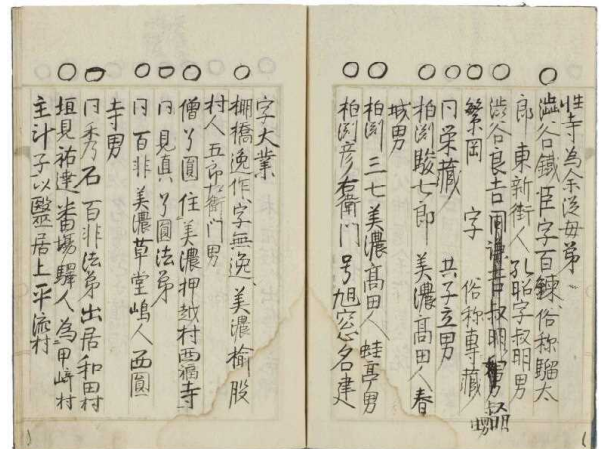
縦 23.0cm 横 16.4cm

江戸時代後期

当館蔵 (中川禄郎家文書)

当館所蔵のなかがわろくろう中川禄郎家文書に含まれる種々の史料から確認できる禄郎の門人の総数は84名に上ります。この「^{もんじんせいめいろく}門人姓名録」は、70名の名前や居所などがまとめて記されている貴重な一冊です。門人の情報は概ね入門順に記載されており、例えば「中川禄郎像」(作品リストNo. 2)に賛を入れたたにてつおみ谷鉄臣は18番目に「^{たにてつおみ}洪谷鉄臣」(後に谷と改姓)として名前を確認することができます。また、41番目に見えるおくのぶえもん奥野武右衛門は、江戸在府中の資金繰りに苦しんだ世子時代の直弼に、禄郎を通じて資金援助を行っていた人物で、禄郎がとりわけ懇意にした門人の一人です。

さらに、本作品からは、彦根藩領内に留まらずまつまえ松前(現北海道)などに住む門人もいたこと、門人の大半が町人や村人、僧侶といった一般の人びとであったことなども判明し、禄郎の影響力の大きさをうかがうことができます。



- 6 一行書「長福丸」 1幅 (作品リストNO.28)
中川禄郎筆
縦 273.9cm 横 96.5cm
江戸時代 天保15年 (1844)
当館蔵 (岩崎正三氏寄贈)

禄郎が藩主直亮に召し抱えられた2年後の天保15年 (1844) に揮毫した大幅です。3m近くに及ぶ長さとその文言から、「長福丸」という名の船で用いる旗を製作する際に、下書きとして作ったものと推測されます。

